



TITLE:

小作爭議原因の研究

AUTHOR(S):

戸田, 海市

CITATION:

戸田, 海市. 小作爭議原因の研究. 經濟論叢 1922, 15(3): 439-468

ISSUE DATE:

1922-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127939>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十卷 第三號

大正十一年九月一日發行

論叢

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず
交通税の本質 . . . 法學博士 田島 錦治
階級に就いて . . . 法學博士 神戸 正雄
基督教文明の發展概論 . . . 文學博士 高田 保馬
社會哲學_{に於ける}主意的二元論的思想 . . . 法學博士 財部 靜治
法學士 恒藤 恭

時論

財産税論 . . . 法學博士 小川郷太郎

資料

小作爭議原因の研究 . . . 法學博士 戸田 海市

雜錄

フアーガスの本能的社會觀 . . . 法學博士 河上 肇
我國の離婚率に就て . . . 經濟學士 岡崎 文規
定價制と正價制 . . . 法學博士 河田 嗣郎

小作爭議原因の研究

戸田海市

我國に於ては、少くとも工業労働者の二倍以上の人口を抱擁する小作入階級の間に於ける社會的運動は種々の點に於て都市労働問題以上の重大意義を有するのみならず、從來世界に於て農業社會問題の最も惡化せる伊太利に比して我國の小作爭議は一層重大となるべしと認むる場合も少なからず。近來社會運動に従事する者も小作問題に其注意を轉回するの形勢を示すに至れり。

小作爭議原因に關し、偶々農商務省農政課長石黑忠篤氏の意見に接せり、政友會政務調査會に於て五月十九日に説明する所にかゝる。曰く、

我國の戸數一千萬戸の内農家は五百五十六萬戸で約五割六分に當つて居り、全國の耕作地は六百十三萬五千町歩に達し其内自作農は五割五分、小作農は四割五分であり、小作農は漸次増加せんとする傾きがある。處が一方日本は農家一戸の平均經營は一町歩で耕作地が狭いのみならず、小作料の競争があつて小作料が漸騰し茲に小作問題が益々喧しくなつた、從來の習慣や現狀に當りて民法其他の諸制度が出来て問題は一層六つかしくなつて來た譯である。而して此小作爭議は逐次増加の傾向があることは大正二年に四百八件、大正十年度に千二百五十五件になつて居るのを見ても瞭であるが、其原

因を検討すれば種々あるやうである云々。

と。而して小作爭議の原因として十四の項目を掲ぐ。余は早速擔當する所の經濟演習の研究題目の一として「小作爭議原因の研究」を加へ、學生をして石黒氏の所謂十四原因を批評せしめたり。本文は當時學生指導の爲めに配付したる參考文に幾分の添削を加へたるものなり。故に一通り農業經濟の智識を有する人々に取りては參考とするの價値少なきを恐る。余は病の爲め久しく本誌に筆を絶ちしが、編輯委員諸君の命に應じて資料欄に本文を提供する事とせり。

第一 爭議原因研究方法

小作爭議の原因を研究するに當りては、先づ爭議の原因の何たるべきやを明にし、更に其等原因を系統的に配列分類し、即ち事實を見出して之に學問的加工を爲すことを要す。故に問題は原因の探究と分類綜合との二段の手續に分る。

一 原因の探究

一、人間が緊密なる有機的の社會組織の下に生存する以上は、表面上如何に沒交渉の如く見ゆる事柄も間接には相互に因果關係に立つ場合多し、故に小作爭議の原因の種類を探究するに方りても極めて間接のものにまで及ぶの方針を採るときは殆んど無限に其範圍を擴張し得べし。如何なる範圍まで探究を限定すべきやに付ては、確定的の限界存在せず、之を決定するは研究の便益に基づく程度の問題なり。

二、小作爭議を以て單に土地賃借の條件に關する爭議と見るべきや。又は農村社會の共同組織者としての地主及小作人兩階級の對立上、小作人が一般に共同組織者として公正の待遇を要求するの傾向強きや。即ち共同生活の建設構成に對して公正なる參加を要求し、又共同建設の結果たる有形無形の社會利益の公正なる分配を要求するの傾向強しと認め、從て小作爭議が表面上は小作料の高低小作期間の長短等の土地賃借條件に集中せらるゝ場合と雖も、尙ほ内面に於ては此爭議を促進する原因が更に深遠なりと認むるや。此の二つの見方に由り爭議原因の種類及其輕重に關する意見に大なる差異を生ずべし。而して此點に關し注意すべきは、小作人階級の進歩の程度の大なる地方は、爭議原因が複雑深遠なるの事實なり。

三、産業革命に付て先驅を爲したる文明國の都會的商工的空氣の内に發達せし現代思想界に取りて、農業と農村社會とは大なる程度に未開の境地と云ふべく、我國の如きは、商工經濟の初期に在りて總ての産業中今尙は農業が最も重きを爲しつゝあるに係らず、思想界は都會的商工的空氣の内にありて、農業と農村社會とは今後新たに發見探求せらるべき領分に屬す。小作問題の顯發は實に我思想界をして此新發見に向はしむるものなり。從つて都鄙各地方各職業及各社會階級の間の有機的關係が如何なる程度に密接なりやに關する見解の異同も爭議原因の探求上大なる影響を及ぼすべし。而して此有機的關係が地方に由りて大差あり、從て爭議原因も地方に由り異なることに注意するを要す。

二 原因の分類綜合

一、小作爭議の原因として探究せられたる諸原因を分類するの標準も、亦固より唯一無二の確定的のものにあらず。各自が最も重要と認め又は研究上最も興味を感ずる觀察點より分類を試むるを得べく、其何れの觀察點を重しとするやは、一概に斷定するを得ず。各觀察點は夫れ／＼特有の價值を有するを得べし。

二、爭議發生の経路を辿りて直接間接原因の區別を立て、又爭議を發生せしむる効力の強弱に由りて主因副因の區別を立て得べし。而して直接原因にして効力弱く、間接原因にして其の強き場合なきにあらず。故に此兩區別を以て同一物を異れる立場より觀察するものの如く取扱ふは當を得ず。

三、爭議原因となれる小作人の要求は、從來の地位を改善せんとする積極的のものと、其地位の惡化を防止せんとする消極的のものとに分つを得べし。昨年末以來の小作爭議は、昨年の不作を理由として小作料輕減を要求するもの多く、從て形式上其要求は積極的なるが如きも、實際には不作に由る小作人の所得の減少を防止するの必要に出づる消極的のものと見るを得べし。只だ近來の小作爭議を通觀すれば、小作人は自己の地位が都會勞動者に比して甚だ劣れることを自覺し從て小作料にして輕減せられずんば斷然農業を棄て、都市勞動に轉向せんとするの氣勢が年々に強まりつゝあり。是れ經濟界の沈衰以來都市勞動爭議が消極的意義を含むこと大となるに反し小作爭議は今尙は大體に積極的意義を有すること大なる所以なるべし。現に昨年來小作人にして小作爭議の手續を経ることなく、直に小作地を返還して他業に轉する者多數に上れるの事實あり

工業労働者は賃金の低下と失業の増加とに苦しみつゝありと稱せらるゝに係らず、小作人にして都市労働に轉向する者多きの事實を見るときは、如何に下層の農業労働が從來不利の地位に立ちしやを察するを得べし。現に自作農すら、其労働に對し相當の報酬を計算するときは、其所有地に對する地代収入皆無となり、又投下資本に對する利息も皆無となるが如く不利の地位に立てり

四、歐洲戦争は世界各國に於ける民衆化的傾向（デモクラチゼーション）を急速に進歩せしめ、男子の專制に對して女子の解放、及資本的頭腦労働的專制に對して筋肉労働者の解放の勢著しく又高給熟練労働の支配に對する下級不熟練労働者の向上も著しくなれると同様に、從來低級の生活に甘んじて社會公共に對し低廉の食物を供給したる農業従業者が一般消費者の勢力又は都市的勢力より解放せられんとし、特に戦争中各國は食糧供給問題に付き食糧消費者たる都市の勢力が其生産者たる田舎を充分に支配し得ることを痛切に實驗し、又都市労働者に立脚する露國の社會革命が田舎の地主を撲滅して自主的自由農業労働の建設に成功したるも、此自主的農業労働の反抗の爲めに破綻を生じつゝあり。今後社會組織の根本原則の如何に決定せらるゝを問はず、農と工、都會と農村とは社會組織の兩本位として利害の一致と共に其反對をも強く示すべし。

我國に於ても、農業従業者の一般の向上特に其收入増加の要求が次第に強まり、地主及自作農は公費負擔の軽減（教育費の國庫負擔の要求も其一方法として見るを得べし）と外國農産物の競争に對する國內生産の保護の要求に重きを置き、小作人は小作料軽減と工業労働移轉とに由りて收入増加を求めつゝあり。現に小作人階級の工業労働兼業又は轉業の盛に行はれ得る地方は、小作

爭議も盛となりつゝあり。何れの場合にても、農産供給高の減少と其價格騰貴とを生じて都市消費者の利益に反せざるを得ず。

此種の觀察點に興味を有する者は、小作爭議原因に付ても、其の商工業的生活との關係の有無厚薄の上より區別して研究を進むることを有益とすべし。

第二 石黒氏列舉の爭議原因

以上、小作爭議の原因の研究方法に付き、大體の方針を明にしたり。更に進んで石黒氏列舉の爭議原四十四項の主なるものを概略説明して、之に簡單なる批評を加へん。研究の便宜上同氏列舉の原因を、一、地主小作人の分配上の利害の相反、二、人口増加に比し我國の耕地狹小なること、三、農業と他の産業との對立關係に於て農業の不利なること、四、土地貸借の方法條件の四部に大別し、更に各項目に付き批評を試むべし。

一 地主小作人の分配上の利害の相反

(一) 小作人と地主とは分配上の利害相反してあること、

第一項の爭議の根源は兩者利害の相反に存することは自明の理なれども、其相反關係が獨り分配上に存すと認むるは狹きに過ぐべく、此外に農村構成者としての兩者の感情が次第に回滿を缺くに至りしことを看過するを得ず、即ち地主階級は因習的に小作人階級を劣等階級として待遇せんとするに對し、自覺しつゝある小作階級の反感の高まりつゝあることなり。而して特に注意を

要するは次の二點なりとす。

(イ) 都會に於ても資本家階級が勞働者を劣等視するは事實なれども、株式會社組織を通則とする現代的大企業に在て勞働者は何人が自己を使用する資本家なるやを知らず、會社里に於て直接交渉を生ずる機會なく、加ふるに勞働者が一の企業の下に勤續する年限は恐らく平均一年以内の短命に過ぎずして常に一企業より他企業に轉ずることを常とするが故に、勞働者が資本家に對して個人的に反感を懷くに至る機會は比較的少なきに反し、地主と小作人とは反對の事情に由り對人的關係を生ずることを常とするが故に、一旦其間の感情疎隔するときは相互の關係益々惡化するに至るを免れず。元來農村邊鄙の住民はご感情に支配せられ易き性質を有するものなるが、地主小作人兩者の間は上述の理由より特に人的感情に支配せられざるを得ず。

(ロ) 土地所有者は、小作人階級に對し身分上優越せりこの傳說的感情強き爲め、苟も農村に生活する者は如何なる高價を拂ふも土地を買入れて地主の身分を得んとするの傾向今尚ほ頗る頑強なり(近來多少の例外傾向を生じつつありとは云へ)。之が爲め土地の價格暴騰して收益價格の二倍三倍に達する場合多し。然るに地主が此の如く高價に土地を買入るときは、小作人の要求に應じて小作社を輕減すること甚だ困難となり、之が爲めに小作爭議の頻發を免れず。

二 人口増加に比し我國の耕地狹小なること

(二) 我國には山岳が多くて耕地が少いに反し人口の増加率が多いこと

第二項の人口増加に比し耕地狹小なるが故に爭議を生ずと云ふときは、人口増加と共に耕作限

界點急激に降下し、従つて小作料も年々大に騰貴するが爲めに小作爭議を生ずるが如しと雖も、今日の小作爭議は、小作料増加に反抗することよりも、寧ろ小作料輕減の積極的要求が爭議原因として重きを爲しつゝあり。只だ我國の耕地が更に廣く、特に低廉有利に開墾し得る餘地が多に存するときは地主の地位が一層弱くなりて小作人の積極的要求も容易に實現せらるべく、従つて頑強なる小作爭議を見ることも一層少なからんと云ひ得べし。

三 農業と他の産業との對立關係より起る爭議原因

- (三) 農業利益が商工業利益よりも少い爲め農業の利益を地主と小作人とに分配することが面倒なること
- (四) 商工業が發達し小作人の轉業で農業勞力の缺乏したこと
- (五) 小作人の生活も從來に比し向上したこと
- (六) 物價騰貴の結果農業生産費が増加したこと
- (七) 穀物の價格が生産費に比例せぬこと

第三項より第七項までは凡て農業と他の産業との對立關係より生ずる爭議原因なるが茲に注意すべきは同じ農業の中にも主業たる穀作農業と養蠶其他の副業との對立ありて、養蠶は戦争以來急速の發展を爲し、特に近來は春夏秋の三季を通じて間斷なく養蠶を行ふに至れるが爲め、此方面に農業勞働の吸收せらるゝこと、其の商工業に吸收せらるゝに多く譲らざるの勢を呈し、従つて小作爭議の原因として重要視することゝ要するに至れり、而して第七項の穀物の價格が生産費に比例せぬことに付ては少しく説明を要すべし。

我國の一般農産物就中米の價格は他の諸商品に比して可なりの騰貴傾向を有し、之が爲め一般

消費者は農民が不當の利を得るものゝ如く信じて不平を懷くに反し、農民は米價の騰貴の程度が尙ほ小なるが爲め農業は他の産業に比して年々不利の地位に陥りつゝありと主張す。此主張たるや米價騰貴に比して生産費増加率が一層大なるが爲めに起る正當のものなるが、其生産費増加の原因は、イ收穫漸減の一般的作用の外に、ロ我國の農業は今尙ほ労働の要素に付き過度に集約的なる在來の生産方法の改良せらるゝこと少なく、從て一般に勞銀騰貴の傾向大なる今日に於て生産費増加が大となるのみならず、ハ同じ社會階級の間にも働きつゝある民衆化の結果として、最下層労働たる農業労働の勞銀騰貴の傾向が他の労働に比して特に強き爲め、生産費増加が特に大となれるが爲めなり。

尙ほ生産費に關聯して考ふべきは、今後の我農業の改良は労働を節約して資本の要素を増加すること(機械の使用、肥料の増加、耕地改良)なるが、近來特に世人の注目を惹きつゝあるは小機械の使用なり。一般農業(穀物耕作)に付き、歐米に比して幾倍の集約なることを必要とする我國の農業に付て大企業の有利なる發達は汎く望み得ざる所なるべきも、小機械を巧みに使用して數町歩を集約的に耕作することは必ずしも不能ならざるべく、若し之を可能なりとせば、自作小作を問はず、今日の如く平均一町歩内外の小規模の農業が三五町歩の規模を普通とするに至り、農業生産者の地位が都會労働者と均衡を保つに至るべく、特に自主的労働者と云ふべき自作農の衰退を防止するのみならず、結局農業生産の全部を自作農に由りて經營するに至るべしとの樂觀説の當否如何なり。

四 土地貸借の方法條件

- (八) 小作制度が不備なること
- (九) 小作權が片務的契約で不安であること
- (十) 地主が絶えず轉々してゐて何時耕地を取上げらるゝや判らぬ爲め不安であること
- (十一) 小作料の支拂が舊慣に因はれてゐること
- (十二) 小作人が相當あること
- (十三) 小作料の觀念が貸貸料觀念にならずして租稅觀念である爲め小作人と地主との關係がしつくり融合せられこと
- (十四) 小作料は全國平均段當り一石二升で收穫の五割五分を地主に渡してゐるが、之を米國に比較すると米國では收穫の約五割で此外地主が牛馬農具等を貸與してゐる、それに比すると日本の小作人の收入が少いことなること

第八項以下は土地貸借の方法條件等にして廣義の小作制度なり、其中注意すべき二三の點を擧げん。

第九項は、小作期限の短かきことなり、一年限りにて更新を必要とするもの次第に増加しつつありて、一見すれば小作人の地位は舊時に比し年々不安となりつつあり。然れども經濟界好景氣にして勞働の需用の大なる際には、雇主は雇傭期間の長きを欲するに反し、勞働者は何時にても現地位を去り得るが如く之を短かくせんとし、不景氣の際には反對になるものなるが、之と同じく今日の小作人は積極的に小作料輕減運動を起し、承認を得ざれば農を棄て、他業に轉せんとするの傾向大なるが故に、全體より云へば今日の小作人は常に必ずしも長期の小作契約に束縛せらるゝことを欲せざるべし。

第十項の土地所有者の變更の頻繁なると固定的なるとの何れが小作爭議を生じ易きやは問題とせらるゝ所なるが、更に土地所有の有様が如何に小作爭議に影響するやに付ては幾多の疑問が提出せられつゝありて、必ずして意見の一致を見るに至らず。例へば次の如きは其疑問の重要なものなり。

(イ) 土地所有の集中と分散即ち少數大地主の存在と多數小地主の存在との何れが小作爭議を生じ易きや。但し土地所有の集中と分散とを問はず、一村の土地の大なる部分が小作人の手に存し従つて農村人口の大なる部分が小作人なる場合に初めて小作人は團結力に由り頑強の小作爭議を起すものにして、農村人口の小部分が小作人なる場合に重大の小作爭議を見ることなし。

(ロ) 土地所有者が小作人と隣接して住居する場合(特に一村内)と、他地方に隔離して住居する場合特に都市の資本家が不在地主となる場合と、何れが小作爭議を生じ易きや。

(ハ) 小地積を所有する小地主が自作と同時に小作を兼營する者多き場合と、全然土地を所有せざる小作人の多き場合との何れが、小作爭議に生じ易きや。

第十一項は小作料支拂が貨幣にあらすして實物なることなり。蓋し、我國に於ては、畑地には貨幣拂即ち金納が相當に多きも田地の小作料は實物拂即ち米納を通則とするが故なり。従て問題の中心點は田地小作料の米納と金納との利害如何に在りて、此問題は夙に食糧問題小作問題等に通じて農業研究上最も興味ある問題の一とせらるゝ所なり。之に關する論争は、其觀察點の異なるに従ひ、小作爭議其他一般に小作人の利害より立論するものと一般國民經濟上より立論するものと

の二つに分る。

第一は小作爭議其他小作人の利害よりの觀察上の論争にして、此場合金納論と米納論との二つの議論が行はる。

金納論の主なるものは左の二説なり。

(イ) 米價は年々騰貴するが故に(他の生産物よりも)、小作料を金納とすれば小作人が此騰貴の利益を受くるを得べしとの説。

(ロ) 米の不作の年には概ね米價も騰貴する故、金納實行の上は小作人は從來の如く不作の起る毎に小作料輕減を要求して紛擾を生ずることを得ざるに至り、之が爲め小作爭議を減少すべしとの説。

更に米納論を辯護する主なる議論にも次の二種あり。

(イ) 毎年米に於て只さへ金融の逼迫せる際に小作料金納の爲め一時に二千數百萬石の米を市場に賣出すことを要するときは、一時的に米價暴落し特に小作人は米商の爲めに膏血を絞らるるを免れずとの説。

(ロ) 小作人は不作の年には米價の高低を問はず慣習的に小作料輕減を主張し概ね或程度に成功しつつあるは、一見不合理の如くにして、實は然らず。元來小作人の收穫米の大部分は家用として必要なる故に(市場に販賣し得る數量は甚だ少なく特に今日の如く農民も次第に麥食を棄てて米食に移りつつあるときは小作人にして自家用の飯米を市場より購入することを要する者も頗

る多きに至れり、小作人は不作の年には自家用を差引きて市場に販賣し得べき量が著しく減少し従て米價騰貴するも尙ほ小作料の輕減を要求するの必要あり。果して然らば小作料を金納とするも不作の年には小作人の生活難を生ずるが故に、依然として小作爭議を生ずることを防止するを得ずとの説。

第二は一般國民經濟上の觀察よりする論爭なり。

金納論の主張する主なる點は次の如し。小作料米納制度の結果として我國の市場に賣出さるゝ米(全產額の約二分の一)の約二分の一即ち全產額の約四分の一は比較的富裕なる大地主の手に握らる。此大地主は市場智識の大なる商人と異り盲目的の投機者なるが爲め、我國の米價は多少の豊凶に關係なく一旦騰貴を初むれば頑強に騰貴を繼續して極端に走り、其必然の結果たる反落が生ずれば更に頑強に下落傾向を續け、之が爲め我國の米價は二年半乃至三年の周期的なる暴騰暴落を繰返し(古來世俗に謂ふ所の高値三年低値三年は略ば事實に合し、其騰落は二十圓以下に落ちて四十圓以上となると云ふが如く大曲線を描く)、以て國民の生産と生活を根本的に動搖せしめつつあり(歐米の必需品たる小麦は戰前に於ては一割内外の騰落を生ずるに過ぎず)。然るに小作料金納となるときは米の賣買の大なる部分が大地主の手より商況に通ずる米商人の手に移りて上述の如き暴騰暴落の弊を緩和すべしとの説。

一般國民經濟上より米納論を主張する者も存在す。大體次の三説に分る。

(イ) 小作金納を行ふときは、前述の如く小作納期たる年末に於て米價が一時的に暴落を生じ、

其後に反動的の暴騰を生じ、即ち一年度内の高低を激甚ならしむべしとの説。

(ロ) 日本米は特産物にして、其數量は平年作に於ても尙ほ國民の全需用を充たすに足らず、歐米人の常食たる小麦の如く世界的生産物たるが爲めに内外融通の餘地を多大に存することなし。故に小作金納の爲め米の供給の實權が米商の手に移るに至れば、巨大なる投機的米商が發生して米價を人爲的に動搖せしむるの危険甚だ大なりとの説。(今日は米の供給の實權が大地主に存するが爲め、米穀投機商人たる米取引所仲買人は、之を株式仲買人に比すれば、其資本平均四五分の一にも足らざる小規模の商人なり)

(ハ) 一國の金融の上より見るも、年末逼迫の際に一時に小作米の賣買の爲めに數億の資金の需用を増加するときは金融界は非常の混亂に陥るべく、結局我金融界は年末に於ける此需用激増に應ずるが爲め平時に於て豫め不用の資金を準備し置くの不經濟を免れざるべしとの説。(小作料金納の一般に行はるる歐米に於ては、收穫時期の多少の前後又は小作料納期の多少の前後に由り英國と大陸との間及歐洲と米國との間に於て國際金融の大渦卷を起し、緩急相扶くるの便を有するも、極東に偏在して國際金融圏外に在る我國には此の如き經濟的方法なし)

第十四項は我國と外國との小作料高低の比較なり。此高低の差を生ずるは、(イ)我國の耕作限界が非常に低下せることの外、(ロ)我國の小作料は、最高限は確定的なるも、不作の年には慣習的に幾分の減額が行はれ即ち最低限が不定なることに注意するを要す。(ハ)土地廣大にして農業の粗放なる諸外國に於て、穀物耕作に付き二毛作なることは稀有の例外にして、通例生産者の收穫は一毛

作より成る。米國の如く粗放農業に於ては特に然り。然るに我國に於ては田地の二毛作利用が其三分の一に及び、而も小作料は通例米の收穫に對して計算せられ、裏作たる冬作收穫（麥菜種等）は全部之を小作人の收入とする場合多きことに注意するを要す。

第三 小作爭議研究上注意すべき二三の點

以上、石黒氏列舉の原因を中心として、爭議原因の説明及批評を試みたり。然れども、苟も眞面目に小作爭議問題の研究に手を下す以上は、更に種々の題目に觸れざるべからず。次の諸問題の如き、先づ解決すべき重要なものたり。

一 小作爭議と將來の地價

本研究には政治上、經濟上、社會上の諸方面の觀察を必要とするものなるが、農業社會問題及食糧増産問題の解決上多くの人々に由り理想的のものと認めらるる自作農の維持及創設を考察するに方り、今後小作爭議頻發して小作人の態度益々積極的となるときは、元來收益の少なき土地所有は投資方法として甚だ不人氣のものとなり、又小作人の自覺向上と共に地主たることを身分上優越なりとする思想が衰退し、之が爲め地價大に下落して貧困の小作農民も尙ほ低利長期の資金融通の制度の力に由り容易に土地を購入して自作農となるに至るべきや否やは注意を要する點なり。從來の如く地價が暴騰して收益價格に二倍三倍するが如き状態に在りては、如何に低利長期金融制度を完備するも、小作人が土地を買入れて自作農となることは概して幸福を齎らすを得

す。故に從來既に一部論者は、自作の爲めにあらず投資の爲めに土地を所有する者即ち不勞所有者に對しては、重率の地租を課し、特に其土地所有の大なるに従ひて稅率を累進的とし以て地價の不當の騰貴と大地主の發生を防止すべしと主張しつつあり。蓋し商工業に在りては企業の規模の大なるほど生産力強くして、企業集中と資本所有の集中とは相伴ふ場合多きが故に、生産上より見れば資本の集中は概ね生産の進歩を示すものと云ふを得ざるにあらず、然るに集約の農業を必要とする我國に於て土地の兼併が行はれ、即ち大地主が發生するも能率の高き大農經營が發生するを得ず、其所有地を細小經營たる小作農に委するの必要を生ず、生産能率上小作農が自作農に劣れることは古來の通説なるが故に、我國に於て自作農が衰退して大地主が發生することは、獨り社會上の弊害たるに止まらず、生産上の退歩なり。是れ自作せざる土地の所有に對して特に財產稅を設け、又は一般財產稅を比例率とする場合にも、土地所有の場合には特に累進率を設くべしとの説を生ずる所以なり。

二 小作人の團結運動の前途

小作人の團結運動が大いに進歩し、今後は土地の公有私有を問はず他人に之を耕作せしめんとすれば、小作人團體と交渉することを要し、特に其土地を小作人團體に交付して適當の處置を探らしむるの外なきまでに小作人の團結運動が發展するの可能性を有するやの問題は興味多く、特に小作運動を指導しつつある人々に取りては緊要の問題なり、前に述べし如く一地方の人口の大なる部分が小作人より成る場合に初めて其團結力が強大となるが故に、小作人の團結運動の發展は土地の私的又は公的の集中を條件とすべく、從つて自作農の維持増加が成功するときは、小作

人の團結運動は發展し難かるべし。

三 農業の薄利と女工

次に女工の問題も看過するを得ざるなり。小作爭議原因として農業收益過小の事實が常に數へらるゝが、實に女工は收入過小の農業を今日まで維持し來りたる農家副業の一變態なればなり。

我國の主食物たる日本米は世界最高價の穀物なるが、而も其價は尙ほ其生産費を償ふに不足を感じ、之が爲め農家は既に米作の爲め相當の勞苦を爲したる上、更に過勞と認めざるを得ざる種の副業に従事して其不足を補填することに由り吾々は米の供給を受けつゝありと見るを得ざるにあらず。此副業は農家の家庭生活の内に於て行はるゝを常とすと雖も、家族の一部が家庭を離れて出稼ぎを爲し、其收入の一部を自家に送金して一家の生活を支持する場合少なからず。其の主なる方法の一は小作農自作農の家族中の未婚の子女が都市に出でゝ收入を得ることなるが、此方法の中以前は下女奉公が主となり、今日は工場の女工となることが重きを爲すに至れり。此女工は大部分綿絲紡績業等の纖維工業に従事するものにして、此種の勞働が如何に呼吸器病其他の疾病を生じ、又風紀の廢頽即ち精神的健康の毀損を生ずるやは周知の事實なり。

西洋にては子女が成長して家庭を離れて獨立の收入を得るに至れば同時に獨立の生計を爲すに反し、特種の家族制度を有する我國に於ては農家子女の工場勞働收入の少なからざる部分が郷里に送金せられ、以て農業收入の不足を補充するの作用を爲す。

此點より見れば、我國民は世界最高價の食物を消費しつゝありと云ふと雖も、尙ほ此食物たる

や其生産者が農業以外の勞働に由りて得たる財源の内より相當の補助金を出して辛うじて生産せられたるものなり。我國の人口に比して如何に耕地が狹小にして耕界の甚だしく下降せるやを察し得べし。

四 小作問題と裏作

第四は小作問題と裏作の不發達との關係なり。

裏作とは田地の冬春期利用にして今日は麥、菜種、綠肥等の爲め田地の三割強の裏作が行はるゝに過ぎず。從來農業改良の努力は表作に集中せられたるの觀なきに非ざるも、將來若し裏作を大いに發達せしむるの工夫が汎く行はるゝときは、左の理由より小作爭議は大いに減少するの見込なきにあらず。

一、耕地の狹小なることを最も經濟的に救済する方法たるを得べし。開墾助成法が成立して大いに新開地を増加せんとするも、新開し得べき土地は耕界以下の劣惡地にして又開墾費巨額となる故、到底多大の開墾を望むを得ず、故に新開と同時に既開地の完全利用の工夫が肝要なるべく、其重要方法として田地の冬春早春の利用の發達を圖ることが可能ならざるか。

二、次に裏作の發達は農業の收益過小の弊を救済するの重要方法たるを得べし。

(イ) 農業の收入不足の補充方法たる一般の副業は、養蠶を初めとして多く春夏秋に行はれ、米作と重複する故、勞力不足を生ず。農業の不利の大原因は、工業の如く一年を通じて平均に其勞力を分配するを得ず、特に冬春早春は一種の失業狀態に陥ると同時に夏秋季には勞働不足を告ぐる

ことなり。然るに裏作が盛んに發達すれば——假令へ理想的ならずとも——大に勞力分配の不平均を救済し、一年を通じて收入を得るの途を開くを得べし。

(ロ) 本來最も安全なるべき農業が、我國にては最も危險多き事業の一となれり。即ち收穫の豊凶の差大なるのみならず、米價の暴騰暴落は他の商品に類例を見ざる甚大の程度に達せり。此不利を免れんとすれば、農家が副業を兼營することも一方法なれども、更に根本的方法は今日の如く夏作たる米作のみに依頼せず、冬作又は裏作を盛んに行ひ、以て收穫の平均と價格高低の平均とを保持することを利益とすべし。近來各地に發達しつつある綠肥栽培の如き裏作は米作の爲めに行はるゝものなるが故に、農家收入の平均作用を爲さざるの缺點あり。我國は戰時貿易の杜絶の際又は外國の穀物輸出禁止の際に饑餓を免れんとすれば、裏作としての麥作に由り迅速なる食物増産を爲すの外なしと雖も、此應急策を有効に行ふが爲めには年々衰退しつつある國民の麥食慣習を發達せしむるを要すべく、之が發達には麥價の低廉生産の工夫も必要なれども、更に重要なるは麥の品質と其加工方法とを改良し、生活程度の向上せる今後の國民の嗜好に適應せしむるの工夫なるべし。

三、田地の小作料は、——多少の例外は存すれども——從來表作たる米作に付て取立つることを通例とし、冬作は其全收穫を小作人の收得する所としたり。故にもし今後冬作にして大いに發達することを得れば、特に小作人の收入を増加するの見込なきにあらざるべし。

從來農業上の研究は殆んど米作養蠶に限定せられ、裏作の如きは甚だしく閑却せられたるが如

し。狹小の土地に閉ち込められて生活せざるを得ざる日本人は、總ての方面に於て諸外國以上の獨特の研究工夫を必要とするに係らず、獨創的活動の不振なるは憂ふべし。

五 小作人とは何ぞや

小作問題の研究上最も重要なるは小作人とは何ぞやの問題なり。

此問題は、總ての小作問題の出發點たると同時に、又總ての重要な小作問題の解決せられたる後にあらざれば充分に理解するを得ざる最後の問題なり。本問題は種々の觀察點より研究することゝを要するものなるは、下に述ぶる所は小作人が社會組織者として如何なる地位を占むるやを研究するに付き幾分の參考となるべし。

生産勞働に相當の熟練を必要とし、而も分業及機械の應用の困難なる場合には——分業及機械を容易に應用し得べく、且つ生産勞働に熟練を要する部分の少なき現代的工場工業の多くは然らず——資本家が多數勞働者を雇入れ大規模に生産を經營することは概ね不利なり、特に其勞働者の自覺の強まるに從て、之を大企業的に經營することが困難となり、寧ろ勞働者を獨立の小企業者とならしめて生産を行ひ以て其自主自發的活動を促すことが勞働者の物質的精神の向上に有利なるのみならず、生産事業を進歩せしむる爲めにも必要なり。近くは京都市内に於ける重要産業にして又我織物業中最高の熟練を要する西陣の織物業を見るに、勞働者の無自覺從順なりし時代には相當の人數を雇用して中等規模の經營を爲すことを有利とする場合多かりしも、近來は企業者が多數勞働者を雇入れて生産するよりも、寧ろ勞働者をして其自宅に於て勞働する小企業者たら

しめ一定の加工賃を拂つて生産の請負を爲さしむるの方法即ち賃織の方法を探ることを利益とする場合多きに至れり。固より西陣にも大企業の發生したる例外なきにあらざれども、中企業が壊崩して小企業の發生を促したる場合は更に多し。

我農業に於ても以前は多人數の男女を雇入れ又數頭の牛馬を備へて數町歩の中規模農業を營むの例は各地に存在したるも、農産物の不足と騰貴との爲め農業が非常に集約となることを必要とし従つて之に従事する労働も舊時に比すれば熟練労働と稱すべき程度のものが必要とするに至りてより、地主多數の賃労働者を使用して大農經營を爲すことは次第に不利となり、寧ろ一定の地代を以て其所有地を農業労働者に貸付けて、之をし、小作人と云へる小企業者として自主的の生産労働を爲さしむることを有利とするに至れり。在來の中規模の農業が倒れて土地所有權が少數の大地主の手に集中することは近時の大勢なりと雖も、此所有權集中は西洋に於て往々見るが如く大規模農業の成立することを意味せず、小作農と云へる細小企業の成立することを意味す。故に近時の大地主の増加は、單に所有の上より見れば資本的勢力の増進なりと雖も、生産の上より見れば非資本的自主労働的小企業生産の増加となれり。只だ此自主的労働も同じ性質を有する自作農に比すれば、生産上及社會上重大の缺點あることは爭ふべからず。

比較的高級の熟練労働を必要とし、而も機械の力を多く使用し難く又多數労働者を雇入れ之を分業的に組織して使用すること困難なる場合、即ち資本的企業として有利に經營することの困難なる上述の場合に於て、労働者を自主的地位に立たしむる所の小企業が優勢となるは何故なりや

と云ふに、高級の勞働能力を有する人間は一般に云へば其自覺も強く、從て之を自主的地位に立たしむるときは其勞働に大なる興味を生じ、之が爲め賃銀勞働者として不自由の從屬的地位に立つ場合に比すれば一層大なる努力を爲すも苦痛を感ぜざるのみならず、一般に勞働者が自主的地位に立つときは自發的に勞働せんとするの意志が強まり、從つて其勞働能力も自由に發展進歩して熟練の高級勞働となること難からざるなり。現に北米に移住して農業に従事する諸國民の内我國移住氏の大部分は最高級の能力を必要とする園藝的農業に従事して他の諸國民の追隨を許さず。是れ我國の農業が非常に集約となり、特に勞働の要素に付て非常に集約となり、從つて穀物耕作の普通農業に従事する場合に於ても歐米に於ける園藝農業と殆んど同程度の熟練勞働となれるが爲めなり。自主的勞働者たる我が自作農及小作農の社會的地位を見るに、恰も中世手工業時代に於て一般の工業勞働者は獨立小企業者となり得る熟練勞働者にして、他の社會階級との比較に於ては今日の工場勞働者の大多數よりも社會的地位の高かりしことと相類す。而して勞働者が小企業者として自己の行動を自決自律するの興味と責任とを感ずる場合には、獨り其生産能力が高まるのみならず、人間としての總ての能力又は人格的能力が高まることは、論を俟たず。我國の農業に於ては、北方歐洲に多く見るが如き大農が成立せず、從つて農業従業者の大多數が賃銀勞働者として不自由の地位に立たず、一般に小作人と云へる小企業者たることは、農村社會の構成上第一に注意すべき點なるべし。我農村に於て集約農業の一種たる養蠶が普及して今日は農家の約二分の一が之に従事するに至れるのみならず、其經營及技術も科學應用の合理的なる改良方法が比

較的迅速に普及し、特に一年數回の飼養を爲す所の專業的の養蠶も大に進歩しつゝあることは、我農民の一般的能力の進歩することを示すものなり。機械及分業の應用し易き現代の工業に於ては、一二の偉人が出現して生産力法の上に新工夫を創設するときは、大なる程度の工業進歩を生ずることを得べしと雖も、手工的性質を有する集約農業に在ては、農民一般が人間として進歩するに非れば生産の進歩を望むを得ず、故に高級の農業の發達しつゝある國は概ね社會的に健全なる國と見ることを得ると同時に、高級農業に依頼すること大なる國は單に生産的見地よりするも、社會的改善に多く努力することが必要とす。

歐洲戰爭までは歐々先進國民は一般に我國民に比し一人當りの所得三四倍乃至七八倍に達するのみならず、労働者階級の所得を比較するも彼は我に比して略ぼ同じ程度の高さを有したり。而して農業労働が工業労働に比し劣惡の地位に立つことは彼我相同じと雖も、其割合より云へば彼の不利は我よりも大なりき。例へば英獨等に於て都會労働者の勞銀は我國に比して三四倍の大さに達せるに反し、其農業労働者の所得は著しく低く、從つて彼等の主たる食物は馬鈴薯にして其生活程度の低きことは殆んど我國の水呑百姓と甲乙なかりき。高度の國民教育が普及し都鄙一般に高度の文化を有する英獨等に於て、其農業労働者は甚だしく蒙昧にして、其人格的能力は我國の小作階級に及ばざるが如き低級のものなりき。此等たる、我國の普通の海外視察者の意外とする所なりしも、彼の農業労働者は賃銀労働者にして我國の夫れは小作人たり又彼は粗大低級の力役を主とするに反し我農業従業者は一般に熟練労働と稱し得る程度のものなることを知るときは、

此現象たる敢て怪むを要せず。

一の社會に於ける最下層民は、低き生活を營むことに由り低廉の勞働を供給して上級勞働と競争し、以て常に上級者の生活程度の上を妨げ又は之を下降せしめんとすること、恰も貨幣流通上グレシャムの法則の行はるゝが如き危懼を有するのみならず、多數の蒙昧低級なる階級の存在することは社會の專制的統制を可能ならしめ又往々之を必要ならしめて文化の進歩を害すること大なり。之を國際的に見るに文化の進歩せる西北方歐洲諸國は低廉なる東歐南歐の移住者山移者の侵入に由りて向上を脅され、米國勞働者の向上は常に歐洲移民の移住に由りて脅さるゝと同じく、一國內に於ても都會勞働者の物質的精神的向上は低級なる田舎勞働者の侵入に由りて妨げらるゝを免れず。我國に於ても農家の士女が女工となりて工業勞働上に重要な地位を占むることが勞働者階級の向上運動に對して大なる障礙をなせることは夙に世人の注意する所なるが、是れ一は女子勞働に適せる纖維工業が我工業の中心を爲し、進歩せる金屬工業機械製造業が不振なるに由るものにして、大體より見れば我國の田舎人口が自作農小作農と云へる自主的勞働者より成立し更に低級なる賃銀勞働者にあらざることは、我國の社會的進歩には有利なり。此點に付ては集約の農業を營める白耳義、和蘭の如きも略ぼ同様にして、資本的大農業の行はるゝ他の諸國に比して有利なり。

集約なる生産を必要とする我農業に於ては機械を使用し得る範圍の狭小なるは既に述べしが、集約なる生産は進歩せる熟練勞働を必要とするが故に、今日の小作人よりも低級なる勞働者我

農業に有利に使用し得る範圍も狭小なるを免れず、大農經營の多く行はるゝ北方獨逸に於ては、最下層勞働者たる農業勞働者も時勢と共に進歩して次第に都會に移るに及び、更に低級なる東歐の農業勞働者の移住出稼に由り其農業を維持したり、我國は東洋に於ては國民の生活程度最も高きが故に、勞働者の來住を自由に放任するときは、多數の支那朝鮮の勞働者の移入を生じて我が下層民の向上を脅かすべく、農業の方面に於ても小作爭議の發展するに従て、地主は小作人を追放し、水田耕作の慣習を有する朝鮮勞働者を移入して之に代らしむること可能なるべく、現に近來諸地方に此事實を見るに至れり。然れども集約なることを必要とする我農業に於て低級なる朝鮮勞働者を有利に使用し得る範圍の狭小なることは、恰も我農業に機械を使用し得る範圍の狭小なると異らず、粗放なる大農の行はるゝ北獨逸の農業に低級なる東歐勞働者の多數に侵入するに反し、集約なる高級の農業の汎く行はるゝ南獨逸、白、蘭、丁の諸國に其侵入を見ざることは注意すべし。

六 農民の不平

小作爭議の發生が商工業に對する農業の不利に原因する所少なからざるは既述の如くなるが、商工業對農業又は都市對農村の關係を明かにすることは獨り小作爭議の研究に必要なのみならず、今後實行せらるべき一般の社會改造問題の理解にも必要なり、實に覺醒しつつある今日の農村が都市に對して懷く所の不平は勞働者の資本家に對し、又女子の男子に對して懷く所の不平に類するものなり、社會の共同維持者としての農民の商工民に比して勞苦の大なる割合に其個人的所

得の過小なるのみならず、農村に於ては人口の稀薄分散の爲め住民共通に享受し得る各般の文化的施設を備ふること都市の如くなるを得ざるが故に、其の共同的社會的所得の甚だ貧弱なるの事實は、社會の民衆化せりと稱せらるゝ今日と雖も、多く舊時と異なる所なく、否な今日の文明が都會文明と稱せらるゝが如く、此點に關する都鄙の間の不權衡は一層増大するの傾なきにあらず、此重大なる不公平が矯正せらるゝまでは社會的平和の確立を望むこと難かるべし、由來農業は商業に比して安全なるが故に、其收益の小なるは當然なりと主張せらるゝるを常とすと雖も、農業が自給自足の範圍を狭めて交通經濟の組織に引込まるゝ程度の大となるに従ひ、其安全の程度を減少するを免れず、特に我國に於ては米價が世界の重要商品に類例を見ざるが如き暴騰暴落を繰返し、加ふるに農業の副業として非常に重要な地位を占むるに至れる養蠶も大なる浮沈を呈するが故に、今日の農業を以て特に安全の事業なりと云ふは時勢の推移に盲目なるの嫌なきを得ず、彼の地代收入に由りて生活せんとし、何等の生産を行はざる純地主階級が農業の不利を唱ふることに對しては何人も之に同情するを得ざるべしと雖も、眞の農業生産者たる自作農及小作農の現代社會に對する不平不懣に至りては到底之を默殺するを得ざるべし。

今日の農村が其の過小なる收入の中より公共の爲めの負擔を要求せらるゝ割合の大なることは特に農村の不平等を甚しからしむる原因なり、今此負擔の不公平と主張せらるゝ重なるものを擧ぐれば、第一は農民の所得に對する租税公課の割合が商工民に比して著しく高率なることなり、大藏省及各地方の農會の調査が盡く正確なりと云ひ難しとするも、同額の所得に對して農民の負擔が

商工民の夫れに二倍する場合多しと云ふは事實に遠ざかりと云ふを得ざるべし、血税と稱せらるゝ兵役の負擔を見るも、人口の割合に農村の負擔の重きこと物税の場合と多く異らざるの不公平あり、特に商工民が巧妙なる脱税を行ひ乍ら常に廢稅運動に奔走することは農民の反感を強むること大なるものあり、第二の不公平は都鄙の間に於ける人口の永續的移動より生ずるものなり、即ち農村は多數の人口を養育して其の生産年齢に達するを待ち之を都市に供給すること年々増加し、之が爲め都市は自己の存在に必要な生産者の養育費の負擔を免れて之を農村に轉嫁することとなる、固より農村人口の都市移轉は常に農村の損失と云ふを得ずと雖も、都市の維持發展の爲めには農村人口を吸収することを必要とし、敗類せる都市の血液が清鮮なる農村の血液に由りて常に更新せらるゝことを必要とする以上は、都市は或程度に此人口養育の費用を負擔すること公平とすべし、然るに公費負擔の割合を見れば、都市は農村を搾取するの關係に立つこと前述の如く不公平なるものあり、第三の不公平は都鄙の間に於ける人口の一時的移動より生ずるものなり、商工業には景氣不景氣の循環ありて、好景氣の際には急激に農村より労働者を吸収して充分の利益を收め、一旦不景氣となりて労働者を解雇するや、其の大多數は農村より吸収したる不熟練労働者なるが、彼等は都市の完全なる失業救済の方法を講ぜざるが爲め所謂歸農の方法を探るの已むを得ざるに至り、農村は次の好景氣の來るまで之を養ふの負擔を課せらるゝこととなる、マルクスの云へる如く今日の商工業を維持するが爲めには平素多數の貧民豫備軍の存在を必要とするものなるが、此豫備軍の維持は失業保險其他の方法に由り都市自身が之を負擔するを正當と

するに反し、我國にては主に之を農民に負擔せしめつゝあり、此の如く都市の農村を搾取しつゝあることは争ひ難き事實なり、都市の立場より云へば都市は文化を醸成して之を農村に分配するの大任を果しつゝあるが故に、農村の之に對する負擔を爲すは當然なりと主張し得ざるにあらずと雖も、農村の文化的施設の缺乏甚しき爲め現代の文明が都會文明なりと稱せらるゝこと前述の如くなる以上は、覺醒しつゝある農村が從順に從來の如き負擔に甘んじ、特に粗衣粗食を農民の天分の如く諦むることは、之を今後に期待するを得ざるべし。

世人或は今日の農民が種々の不平を唱ふるは、其の農業勞働に對して興味を失ふに至りし結果に外ならずと主張する者なきにあらず、然れども今日の我農業は益集約の程度を高めて園藝的となりつゝあるが故に、今日の農民は最早や農業勞働の内に興味を發見するを得ずと云ふは、今日の勞働者が其の機械的分業的なる工場勞働の内に興味を見出だすを得ずと主張するよりも更に皮相的の觀察なるべし、元來人間の活動慾は生理的色調の強き飲食慾よりも遙かに多く人間の社會性に原囚し、即ち社會の爲めに且つ社會と共に活動せんとするの要求にして、吾々は生産の爲めに勞働すると同時に、其勞働を媒介として社會と融合せんとする者なるが故に、一旦勞働者又は農民が共同勞動者として社會より公正の待遇又は當然の敬愛を受くる能はずと感ずるに至れば、現在の境遇に於ける勞働に付ては非常の不快を感ずるゝ免れず、然れども是を以て彼等が勞働自身に興味を失ひたりと云ふは速斷たるを免れず、彼等の要求は社會より當然の敬愛を受け公正の待遇に浴しつゝ、勞働を爲さんとするに在り、即ち勞働を自我の實現なりと感じ、之を神聖なりと感じ得

る境地に立つて勞働せんとするの要求なり、總て今日の社會運動の窮極の目的は各自が社會共同より成るべく多くを分捕らんとするが如く低き程度に停止せず、更に進んで各自が社會共同の爲めに快よく其最善を盡し得る地位に達せんとするに在り、是れ實際の社會運動が種々の重大なる缺陷を伴ふに係はらず、道徳上不可抗の權威を有する所以なり。

農村の都市に對する不平は文化の民衆化しつつある文明國に共通の現象なるが、茲に注意すべきは革命露西亞の重大なる弱點も亦此所に存するが如し、今日の露國政府は勞農政府と稱せらるる雖も、主として都市勞働者に立脚することは争はれざる事實なり、然るに露國の都市は本來政治的宗教的に成立し、少數の貴族僧侶が人口の八九割を占むる農氏の膏血を絞り、之を消費享樂するが爲め不相當に尨大なる華美の諸都市を建設したるものなり、前世紀の末に至りては露國の一般都市も他の文明國の如く頗る商工業化し、即ち消費的なるよりも一層多く生産的となりたるが如しと雖も、其商工業の主なる部分は世界無比の保護關稅に由りて成立し、又其運轉は外國の資本と技術者經營者との力に依る所多くして自立自營の能力極めて乏しく、従つて農村が都市の爲めに搾取せらるゝ關係には殆んど何等の改善を來たしたりと云ふを得ず、而して革命後に於ける都市の生産力の破壊は特に大なるが故に、其の農村に寄生する程度は寧ろ一層大となりたりと見るを得べし、都市に立脚する露國の現政府の存立の爲めには、國內に於て一定程度の私有財産制度を認むることを妨げざるべきも、外國貿易は之を政府に獨占することを要し、民間に之を開放することは甚だ困難なるべし、何となれば若し之を民間に開放するときは、農村は製造品の大

部分を低廉に外國より得ることを有利とするが故に、露國の都市生産物は内外の反感を惡しからしむるが如き高率の保護關稅を設くるも尙は農氏の需用を失ふて經濟上より都市の存立を危ふせらるゝに至るべければなり、露國政府は貿易獨占に由り低廉に外國より輸入したる製造品を高價に農村に分配して其差額に由り能率の低き尨大なる都市を維持することを必要とするが故に、其貿易獨占は即ち保護制度たると同時に財政上の專賣制度たることは、我國の鹽專賣制度に類するものなり、由來露國の農氏は極めて幼稚にして制禦し易しと稱せらるゝと雖も、彼等亦既に地主を撲滅して革命を體驗したる者なるが故に、露國政府が更に大に農氏に接近するにあらずれば社會的調和を確立すること難かるべし、而して其接近は現政府の方針として傳へらるゝが如く農業を電氣化し、従つて農村生活を大に都會化することに由り初めて成功するものなりや否やは別に研究を要する問題なり。